

神戸三田キャンパス講座

<英米文学における愛の諸相>

シェイクスピアの『ソネット集』に見られる愛の形

○講師プロフィール

竹山 友子(たけやま ともこ)

広島大学大学院文学研究科博士課程後期修了。博士(文学)。専門は初期近代イギリス詩、特に女性の翻訳・翻案・創作作品の研究。主な著書に『17世紀の革命／革命の17世紀』(共著、金星堂、2017年)、『英文学の地平—テキスト・人間・文化』(共著、音羽書房鶴見書店、2009年)などがある。

○講義概要

『ハムレット』や『ロミオとジュリエット』などシェイクスピア劇は現在でも世界中で上演されています。しかしシェイクスピアが劇作家であると同時に詩人であることはあまり知られていません。この講義では詩人としてのシェイクスピアに焦点を当て、16世紀後半に流行したペトラルカ風恋愛詩のジャンルに属する詩集『ソネット集』(1609年出版)における愛の形を探ります。詩集の中核をなす青年貴族への愛、後半のダーク・レディと呼ばれる女性への愛、三角関係の捻じれた愛など、シェイクスピアが表現する愛の形を考察します。

○参考文献等

William Shakespeare, *The Complete Sonnets and Poems* (Oxford University Press, 2008年)、
岩崎宗治編訳『英国ルネサンス恋愛ソネット集』(岩波文庫、2013年)

閨房(けいぼう)の政治学—サッカリーを通して読むスタイル—

○講師プロフィール

横内 一雄(よこうち かずお)

関西学院大学教授。京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士。専門はイギリス文学。特に、20世紀の前衛作家ジェイムズ・ジョイスの研究を行ってきたが、近年は研究の重心を初期ヴィクトリア朝文学、とりわけウィリアム・メイクピース・サッカリーやトマス・カーライルに移しつつある。最近の業績に“Finnegans Wake as “Sartor’s Risorted” or Sartor Retold: Recovering the Hidden Carlyle in Joyce” (Fairleigh Dickinson UP, 2018), “Thackeray’s Early Paris Tales, 1837-40: Rogues, Gamblers, Artists” (関西学院大学、2019)がある。

○講義概要

「閨房の政治学—サッカリーを通して読むスタイル—」と題して、18世紀初頭に実在したある作家夫婦の愛の物語に迫る。19世紀の作家サッカリーはこれに取材して「閨の説教」(curtain lecture)——寝室で妻が夫に浴びせる小言の嵐——の場面を描いたが、何を根拠にそんな場面を描いたのか。作家夫婦の書簡を丹念に読み解くことで、現代と変わらない夫と妻の権力闘争の様相を浮かび上がらせてみたい、それを「愛」と呼べるかどうかは別にして。

○参考文献等

Steele, Richard. The Epistolary Correspondence of Sir Richard Steele. Ed. John Nichols. 2 vols. London, 1809.

Thackeray, William Makepeace. The History of Henry Esmond, Esq. Ed. Donald Hawes. Oxford: OUP, 1991.

あれも愛 これも愛 たぶん愛 きっと愛—ヘミングウェイ文学における同性愛—

○講師プロフィール

新関 芳生(にいぜき よしたか)

関西学院大学文学部教授。北海道大学大学院文学研究博士後期課程修了。専門はアメリカ文学で、特にアーネスト・ヘミングウェイ、ハーマン・メルヴィル、マーク・トウェインの著作の中で、身体がどのように取り扱われているのかを解明することが研究テーマ。日本ヘミングウェイ協会事務局長。

○講義概要

ヘミングウェイといえば、『日はまた昇る』における闘牛、『武器よさらば』や『誰がために鐘は鳴る』などで描かれる戦争、あるいは、『アフリカの緑の丘』におけるアフリカのサファリでのハンティングといったような、きわめて男性的でマッチョなイメージを喚起する作家であり、実際に作家本人もそのようなパブリック・イメージを演出していました。しかし、彼の作品の中には、こうした男らしさが奇妙な形で変容し、彼が生前表面的には嫌悪していた同性愛的な側面を垣間見せるものがあります。今回の講義では、そのような短編小説のひとつをじっくりと分析し、ヘミングウェイ文学における多様な愛の形を明らかにしたいと考えています。

○参考文献等

特になし。